

京大東洋史辞典編纂会編

『新編東洋史辞典』

山田信夫

長年わたしたちの親んで来た、いわゆる京大東洋史辞典が、今回、「新編」の文字を付して新しい形で世に送られた。旧版がはじめて出版されたのは昭和三十六年であり、三版を重ねたが、第四版は改訂増補版として昭和四二年に刊行された。それも版を重ねて広く用いられていたはずだが、今回は、根本的に新しくつくりなおされたのである。

体裁、組み方には変りはない。そして、付録・索引なども同じようについている。しかし、付録として、アジア各国統治表、アジア諸国年号表、中国歴代官職表、アジア名辞難読表、中国度量衡表、アジア主要貨幣要覧、アジア歴史地図三〇図が、旧版と同じようにあるほか、新しく現代中国漢字(簡体字)表が追加されているのは時宜を得たものと思う。また索引は、前の二段組みを三段組みに改め、おおよそ五割増ほどの詳細なものになっている。このように基本的には、実用に便利な小項目主義の中辞典ということには変りないし、中国中心の東洋史から脱皮して、アジア全域を対象とする意図も、後述のようにいよいよ明確なのであるが、今回、大きく変わったのは編集体制である。

旧版は京都大学文学部東洋史研究室編であったのに対し、この新編は、京大東洋史辞典編纂会の名になっている。前回は、当時新進の間野潜龍助手と狩野直禎の両氏が、主として項目の選定、原稿の整理にあたり、一七名の分担執筆、それを、宮崎・田村・佐伯・羽田・佐藤の五人の先生が校閲し、校正にはまた大学院生があたるという、まさに当時の京大東洋史研究室総動員の体制で、この新しい企劃にとりくみ実現したものであった。それに対して、今回の新版はそのような総動員体制ではない。田村先生を代表者とし、その他、間野・狩野両氏をふくむ一二名の方で編纂委員会を構成し、項目選定から執筆、さらに校正に至るまでのすべてを、この方たちが専門に應じ分担して、でき上ったのである。

このように編集体制は大きく変り、旧版の全項目について再検討を加え、「なるべく旧版の遺産を継承することにつとめ」た——田村氏「序」より——けれど、必要な項目はすべて新しく書き改めたという。項目数も、初版の約五、〇〇〇余に対して、増補版はそれに二五〇余を加えたが、今回はさらに約七〇〇項目増加して、総計約六、〇〇〇項目を数えるに至っている。ページ数も、初版で九九四ページ、増補版で一、〇三五ページだったものが、新版では一、一三八ページと、約一〇〇〇ページふえているのである。項目増は、増補版のときも、北アジア・西アジア、それにインド関係などがふえていたが、今回も、西アジア・インド、さらに朝鮮半島に関する項目に配慮されていることが、目につくところである。関係された方から現代史関係では苦勞した、という話を聞いたことがあるが、それはそうだろうと思う。また、生卒年など、辞典利用者は特別のことはないかぎり、そのまま受けとっている

わけだが、執筆者として確認しようとする、簡単にゆかぬことは珍しくはない。この点についても、非常な苦勞だったと聞いた。そもそも、この改版の話は、昭和四五年頃の大学紛争時の直後からおこり、項目選定作業は、関係者のあいだではじめられていたそうで、それがようやく実を結んだわけである。編纂委員会の諸氏が、少数で全般にわたって責任を負ってやってこられた、その御勞苦に、あらためて敬意を表したい。

いま個々の内容について、いちいち比較検討する余裕がないけれど、こころみに冒頭の「あ」の部についてみると、全部で、数えまちがいがなければ二九五項目あり、そのうち、増補改訂版でふえた一二項目に、さらに今回五九項目が加えられている。ほぼ増の増加である。「あ」の部はとくにカタカナが多いので、西アジアやインド関係の項目のふやさされていることが、ここにまさにあらわれていると言えよう。そしてこのばあい、まず、アラビア語・ペルシア語などのカタカナ表記法に苦心改善した跡がいちじらしい。

一般にわたしたちが日本語でものを書くばあい、誰でも苦心する外国語のカタカナ表記について、本辞典も凡例で、「原語の発音を重視した。しかし、わが国で一般に慣用されているものについては、それにしたがった」として、これは旧版以来同じである。しかし第一に、イスラム世界に関するとき、なにをもつて原語とするか、で苦心することが多いわけで、この点、本書では新しい一つの方針がうかがえるようである。

たとえば、イスラム教徒の人名でアブド——「召使・しもべ」の義——のつく名は多いけれど、ウマイヤ朝のカリフ *Abd al-*

Malik、トルコ系のオスマン朝のスルタン *Abd al-Aziz* を、旧版ではそれぞれに、アブドウルマリク、アブドウルアジーズと表わしていたのを、今回は、前者はアブドアルマリク、後者はアブドゥラージーズとしている。後者のばあい、オスマン朝ではトルコ化して、*Abdülcaziz* と書かれるのがふつうだったという事実を重んじ、トルコ化したものを原語としたのであろう。その他、旧版のマフムード二世、ムラード一世は、それぞれマフムト二世、ムラト一世と改めており、オスマン朝関係者はみな、このようにトルコ流の発音によるカナ表記に、統一してある。なお、オスマンについて言えば、旧版ではオスマントルコ帝國とあった見出し項目は、オスマン朝に改め、内容は全面的に書きなおされているし、この王朝の創始者についても、旧版ではオスマンとしていたのを、今回はオスマンベイとして、よりくわしく述べられている。さらにイスラム史・オスマン史上重要なオスマンリを、新しく項目として立てている。いずれも、トルコ学本流に則した大きな改善である。なお、これは全体を通じて言えることだが、参考文献が、より新しいものに変えられているのは当然としても、一般にふやされているようで、ありがたいと思う。

わたしなどもいつも苦慮する、チンギス・カンのカン・カインについても一貫した方針が認められる。すなわち東方のモンゴル系・トルコ系については、カガン・カイン・カンとし、西方、中央アジアや西アジア方面の、トルコ系もふくめてアラビア文字で伝えられているものばあいは、ハカン・ハイン・ハンとしている。旧版でチンギスカン、オゴタイカン、キプチャクカインとあったのは、新版でも同じだが、旧版ではカラカン朝、カリ

ーム・カン、ヒヴァー・カン国としたのを、今回はみなカラ・ハン、カリーム・ハン、ヒヴァー・ハンとしているなどである。細かく言い出せば問題も残るにしても、これはたしかに一つの見識だと思う。いずれにしろ、より原語の発音に近くという方針は、その他たとえば、たまたま目にとまったものでも、イランのカジヤール朝の始祖を、旧版ではアガー・モハメッドとしてあったのを、正しくアガームハンマドと改めているし、イブン・バトゥータやマシーディーのような、慣用化されているとも言えそうなものも、イブン・バトゥータ、マスウーディーと、より原語的なものに改められている。

この、わが国で一般に慣用されているものは、それにしたがうというのが、凡例に示された外国語のカタカナ表記法に関する、第二の点であったが、マホメットとかコーランなどは、まさに慣用そのものとして用いられている。それはそれで良いけれど、マホメットの名は正しくはムハンマドであることは、この頃は相当一般化している。マホメットの項目の中で、原名はムハンマドと説明するだけでなく、せめてムハンマドの項目を「見よ」項目としてでも立てておくべきではなかったろうか。彼以外の人名で同じ名は、みなムハンマドとされているのである。索引にムハンマドがないのも、不備であった。なお旧版で欠落していたアッラーの項目は、今回は収められている。

一般に慣用されている、というのも人それぞれの判断だろうが、モンゴル・蒙古については、本書のばあい、いささか気になった。旧版では、地域名として「もうこ 蒙古(モンゴリア)」という項目と「もうこもじ 蒙古文字」という項目が、蒙古八旗や蒙古部、

あるいは蒙古遊牧記・蒙古連合自治政府などとならんで、立てられてあったが、今度新しくその言語に關しても一項目あり、それは「モンゴル語」になっている。そして、「蒙古」「蒙古文字」は旧版のままなのである。蒙古八旗以下のものは歴史上の事実だから、そうあるべきだが、地域名や文字については、言葉と同じようにモンゴルとすべきだと思ふ。最近の高校教科書でも、かつての蒙古はモンゴルに改められたし、漢字しか用いない中国以外、みなモンゴルであつて、わが国でも蒙古は、もう一般的ではないはずである。

カタカナ表記とならび、ローマ字表記の方法についても大きく前進していると思ふ。マホメットのようにヨーロッパ語化したものも、併せ記すことはあつても、それだけでなく、むしろ極力、ほんらいの歴史記録に見える原語のローマ字表記を、原則として示そうとされているようである。このような例は随所に見られるが、たとえば、ホラサーン、ホラズムを旧版では安易に *Khurasan*, *Khorazin* としてあつたのを、今回は *Khurāsān*, *Khvārazm* としているなどである。また、中国史書にも漢字で出てくる北アジア、アルタイ系諸民族の言語のばあい、旧版では、明確なものでも脱落があつたが、今回それも改善され、原語のローマ字表記と漢字表記とを並記する努力が払われている。旧版でアルタン・カンについて、漢字の俺答汗だけだったが、*Altan-khan* とローマ字表記も今回は示されている。

ただし、原語が確認されていないばあいについては、いろいろ苦勞されているようであるが、現段階ではローマ字表記は避け、見出しも漢字音読みにとどめるよう、統一しておく方が、誤解を

生じなくて良いと思う。たとえば、突厥のカガンの出自氏族である阿史那に関連して、今回の新版でも、旧版を踏襲して、阿史那賀魯・阿史那骨咄祿・阿史那氏の三項目が立てられているが、いずれも阿史那をアシナとカタカナ表記にしている。しかしこの名は、阿史那という漢字表記しか知られていないのであって、わたしなどもなにかのばあいにはアシナと書くことはあるが、本書がせっかく原語を重んじ、いろいろ表記法を整理しようとしている以上、原語不明のこの語などは、やはりひらかな表記にとどめておく方が良かったのではなからうか。とくに阿史那骨咄祿だけは、骨咄祿の原語をクトルク Qutluq と断じてまちがいないので、クトルク Qutluq と記したままでは良いが、Ashina というローマ字まで入れたのは、もう少し学界の論議をふまえてからの方が良かったと思う。なおこの名については、旧版で漢字表記を示さないという不備があったのは訂正されている。同じく突厥の初代カガン、伊利カガンについても、イリカガンとしているが、伊利の原語は、本書でも H(ig) とローマ字表記を示しているように、確認されていないとはいえず、H(ig)の可能性があり、むしろその方が蓋然性は高いと思われる。やはり、「いりカガン」にとどめておく方が良かった。

金の太祖、阿骨打について、「見よ」項目ではあるが、旧版でアグダとあったのをアクダとしたのは、正しいと思うが、別にアコツダという、やはり「見よ」項目が、旧版のままあるのは、不手ぎわとしか言いようがない。わたしもよく知らぬが、原語アクダの推定はほぼまちがいないようだから、アクダは良いにしても、阿骨打の音読みをかかけるのなら、当然ひらかな書きであるべき

だし、索引に阿骨打だけあげておいても、十分かも知れない。なお金史関係では、勃極烈、孛堇、猛安謀國などについて、孛堇は *pašim* というローマ字表記を漢字に並記し、猛安と謀國については推定原語を解説しているのに対し、勃極烈については、原語に関する言及がなにもない、などはいささか気になった点である。表記法のことばかり、それもわたしの限られた能力で気づいたことばかりで申しわけないが、とにかくこのような書物づくりのばあい、きりがないような、しかも苦勞ばかり多い問題で、前にもふれたように、幾つかの明確な方針を打ち出されているように見られるだけに、今後のためにも、あえて瑕瑾というべきものまであげつらってみた。御容赦願いたい。

各項目の記述内容までは、到底批判する力はわたしにはないけれど、前述のように新しい参考文献の指示はふえているし、「あ」の部についてみても、アッバース朝など、項目としては前にもあったが、今回はほぼ倍増するぐらい書き改められている。また、アラブ民族主義運動の項目もそうである。このような現代史関係では、アラブ首長国連邦のような新しい項目がふえていることはもちろんである。なお、いちいち検索できなかったが、アフリカ地域に関してもアジアとの関連の深い項目については配慮した、と序文でのべられており、たまたま目についた、ローデシアの項目も、今回は三倍近い記述になっていて、当然ながらザンビア共和国にもふれられているし、関連してマラウイ共和国という、新項目も立てられているのである。

またこれは、旧版のときから注目されたことであるが、たとえばモンゴル語でなら、アイマク・アイル・ウルス・オボク・オル

下などの社会関係用語、漢語でも豪族などをつとめてとり上げて
 いることは、小辞典ではもちろん期待できない、この種の中辞典
 としても、限られた字数で説明するのにちゅうちょし勝ちなはず
 であるのに努力されていることは、賞讃すること大きいと思う。

それに、文化史関係にも配慮されていて、イスラム・西アジア関
 係でも、新しく項目としてあげられたものに、文人・学者が非常
 に多い。アラブ文学史上の一ジャンルであるアダブとか、イスラ
 ム社会史上のアヒーだとか、かならずしも一般的になっていない、
 しかし重要な歴史的事項は積極的に収められているし、インドに
 関しては、倫理観を示す用語アヒンサー、哲学上ブラフマンに対
 置されるアートマン、神話に登場する火神アグニなど、みな今回
 新しく項目として立てられているのである。

この種の、広般な対象を内容とするものについては、その批判
 など、到底わたし一人の手に負えるものではなく、とくに東アジ
 ア・南アジア関係について、その方面の専攻者の御意見をうかが
 いたいものである。しかし、くりかえすようだが、このような辞
 典編集の仕事は、あまりにも労多くして、できてみるとそれほど
 見ばえのするものでもない。良く言われるように、間違いがなく
 てあたりまえということで、辛苦の一字一句も、専門家でない一
 般の人には通じないのである。それにしても、今回いささかなり
 とも、その気になって旧版とも比較検討する機会を与えられてみ
 て、まさに新編の名に価するものであることは、断言できる。二
 〇年近くの歳月の間の、学界の進歩を反映するものになっている

と云ってよい。また、特に印象づけられたことは、旧版刊行のさ
 いの、新しい東洋史学を展望し、その要請に応じようとする意図
 が、この新編にも一貫していることであつた。

わが国の東洋史学は、明治以降、漢学の一部であつた中國の歴
 史叙述・研究から、独立した中國史学、当時でいう支那史学とな
 り、さらに、中等教育科目の万国史が成長して西洋史と東洋史と
 になったのに応じて、はじめて一つの学問分野となつたことは、
 衆知のとおりである。そして今や、東洋史学もアジア史学に脱皮
 しようとしている。中國中心の漢文東洋史は、急速に全アジアを
 対象とするアジア史へと、変貌しつつあるのである。そして、こ
 のアジア史志向を早くから問題にしたのが、ほかならぬ宮崎市定
 ・田村実造の両先生などがリーダー役を果たされた、京大東洋史
 であり、新分野にとりくむ人材が育成されて、今日に至つたので
 ある。この辞典が、新分野関係の項目をこれまでになく重視して、
 新しく編集され得たのは、まさにその大きな実りと言えよう。そ
 の意味では、あるいは将来また、大きな改訂増補の要請される時
 期が、そう遠くないうちにくるかも知れない。マホメットをムハ
 ムマドとしてしまふとか、中國名にも原音をローマ字で入れると
 か、ということになるかも知れぬが、いずれにしろ、現在の段階
 で、新時代に即した本書が、このような形で世に送られたことを
 よろこびたい。

(A5判 一一三八頁 一九八〇年三月 東京創元社 七五〇〇円)

(大阪大学文学部教授)